



都道府県作業療法士会連絡協議会

NEWS

発行所：都道府県作業療法士会連絡協議会
四国支部事務局
〒779-3122

徳島県徳島市国府町府中 592 番地 7

株式会社 豊結会 デイサービスセンター **For You** -国府-

TEL:088(6789)777 FAX:088(6789)977

発行人 上田 裕久
編集人 田中 茂

第 32 回四国作業療法学会のご案内



第 32 回四国作業療法学会
学会長 吉野 哲一

第 32 回四国作業療法学会の学会長を仰せつかりました、徳島県作業療法士会の吉野と申します。第 31 回四国作業療法学会では、はじめてのオンライン開催となり、これまでリアル参加が困難な方には自宅で聴講できるというメリットがありながら、オンラインに馴染みのない方にはちょっとハードルの高い学会となったかもしれません。次回の四国作業療法学会におきまして現時点では、オンラインとリアルの両方を検討しておりますが、コロナウイルス感染拡大の懸念もありますので、オンラインのみとなることも考えられます。学会の会期につきましては、コロナ前の会期へ戻していくことを鑑みまして 2023 年 1 月 28 日、29 日を予定しております。

今年度の学会は、「創造する作業療法 (仮)」をテーマに現在内容構成を考えております。現在の社会情勢において、コロナショック、ウクライナ危機などにより私たちの生活も大きく変化しました。医療・福祉職においても活動や行動の制限もありながら、利用者サービスの低下にならないように創意工夫しながら業務や、デジタル変革においてオンライン中心になるなど新たなサービスが生まれたのではないのでしょうか？まさに破壊と創造の中でこれから私たちは何を創造していけばいいのか？アフターコロナの社会でこれから作業療法士としてどのような技術が必要か？未来の作業療法士の在り方などを考えられる学会にしたいと考えております。

徳島の戦国武将「三好長慶」は、「人間は木と同じ。風が強い所では独り立ち出来ない場合があり、その時は添え木をしなければならない。人間の修行はこの本体である木に対しての添え木と同じ。添え木のない人間は、必ず倒れる。」と言ったそうです。自らの才能だけに驕らず、修行によって精神を高め、立派な人間になれると説いていました。私たちも研鑽を怠らず、作業療法士としての添え木となる学会を目指しますので、たくさんの方のご参加をお待ちしております。

第 31 回四国作業療法学会をおえて

第 31 回四国作業療法学会
学会長 浅川 英則

春の陽気が感じられる日が増えてきましたが、皆様お変わりありませんでしょうか。

この度、前回の第 30 回四国作業療法学会がありました 2019 年 9 月より、実に 2 年と 5 カ月の期間を経て、2022 年 2 月 26 日、27 日に第 31 回四国作業療法学会をオンラインにて開催することができました。開催にあたりご協力いただきました皆様に、この場をお借りしてお礼申し上げます。当方のリクエストに快く応えていただいた講師の先生方をはじめ、司会、座長をお受けくださった先生方、演題発表にエントリーしていただいた先生方、そして学会に参加してくださった先生方、心より感謝申し上げます。

終えてみての感想は、オンラインでの学会はやってみると楽しかったということです。対面での学会運営しかしたことがなかったため、最初は本当に何から始めてどこに向かうのかといった状態でした。しかし、やれば少しずつ要領を得ていくもので、発見、確認、応用というように一つ一つの作業を進めていきました。何事もそうですが、最初は初心者でも続ければ上手になります。今回はその第一段階を通過したということです。次に行くとすれば準備に要する時間も大幅に短縮できると実感しています。

今回、学会参加者は二日間延べ 214 名と通常の四国学会からするとかなり少ない結果となりました。コロナ禍であることや、オンライン環境やデータ通信料などの要因で参加を見送るとの話もお聞きしました。また、開催地に直接出向いて、友人に久しぶりに会えたり、新たな出会いがあったり、夜は懇親会で親睦を深めたりという従来の学会ならではの楽しみもありませんでした。今回は zoom ウェビナーにて行いましたので、参加者同士のお顔も見えず、対面での学会とは対極的な学会だったのかもしれない。約二年前までは当たり前だったことが、今は憧れのようになっていて、そう考えるとその時にやれることをやっておくというのは、とても大切なことだとつくづく感じました。

今後、世の中の状況がどのように変わっていくのかは分かりませんが、それぞれの生活の中で大切なことを優先していく形で良いと思います。その選択肢に学会が入った折にはぜひご参加いただき学会を盛り上げていただけたらと思います。その機会に皆様とお会いできるのを楽しみにしつつ、私自身も日々励んでいきたいと思っています。コロナは未だ終息の兆しが見えませんが、皆様の健康と安全が守られますよう心より願っております。



A rectangular box with a scroll-like top edge, containing the title '受賞報告' (Award Report) in bold black text.

受賞報告

優秀賞受賞者

- コロナ禍における子ども運動教室の必要性

稲富 惇一（土佐リハビリテーションカレッジ）

- eスポーツで広がる世界

大前 博司（徳島大学病院）

- 刑務所でニーズを重視した作業療法が展開できた一事例
～自閉症スペクトラム障害のある受刑者に対して～

足立 一（高知リハビリテーション専門職大学）



県士会トピックス



徳島県



徳島県作業療法士会 事務局

徳島県作業療法士会 細川友和

徳島県作業療法士会では平成27年度から徳島県地域医療介護総合確保基金事業として、「生きがいある生活行為推進指導者」を育成する目的で、介護予防推進リーダー研修を開催しています。昨年度からは新型コロナウイルス感染症の感染予防対策として、対面研修とオンライン研修を同時に行うハイブリッド開催を行なっています。平成30年度からはアップデート研修も開催し、今年度までに介護予防推進リーダー研修を297名、アップデート研修を60名が修了しました。修了者にはC型事業や地域ケア会議の助言者等として活躍いただいております。特に地域ケア会議については年々、相談いただく市町村が増加している状況です。作業療法士の立場から有益な助言を行えるよう継続的な質の向上が必要です。そのため研修内容も毎年見直しており、今後は新規受講者だけでなく、修了者に対して再受講も促してゆきたいと考えています。



香川県



香川県作業療法士会 事務局

香川県作業療法士会 小松博彦

今回は、広報部の活躍を紹介したいと思います。令和元年から広報活動をリニューアルしました。それまでも香川県最大の商業施設ゆめタウンや高松駅周辺を拠点として、作業療法の広報イベントやアンケート調査など創意工夫をしてきましたが、ターゲットが広く、その場だけの理解に止まってしまうことが課題でした。木村勇介広報部長を中心とした部員たちは、ターゲットの明確化と自ら足を運ぶことを目標に、「高校訪問活動」をスタートしました。「作業療法士になる」ことに一番近い高校生を対象に、趣旨に賛同いただける高校を募ると1校からの依頼があり、10名の高校生が参加してくれました。令和2年は2校からの依頼があり、合わせて21名。令和3年も2校から依頼を受け、27名が参加してくれました。参加者には作業療法士を目指している学生も多く、「自分で調べるだけでは限界があり話を聞けてよかった」「実際を知ることができた」「専門学校や大学などについて知れた」といった感想があり、質問では「アルバイトしながら学校は行けますか」といった内容も聞かれました。同席している学校の先生は「イメージが違った。進路指導で生徒に伝える材料になった」「またお願いしたい」と非常に好意的な意見もありました。令和4年、6校からの依頼を受けています。新型コロナの影響もありますが、着実な広報活動を展開しています。





愛媛県作業療法士会では、今年度より「臨床実習指導者講習会運営委員会」を立ち上げました。講習会の企画・運営を通じて後輩育成のサポートを行っています。今年度も zoom によるオンラインで年2回開催しました。当初は「オンラインでも活発な話し合いが出来るのか。報告書の作成は出来るのか。」等、不安が強かったのを覚えています。しかし、受講者の皆様からは活発な意見が飛び交い、報告書の作成も大きな問題は無く行えています。また、臨床実習の在り方や変化点に関して、1日目は否定的な意見が挙がりますが、2日目には肯定的な意見や前向きな意見を多く聞くことが出来ます。その為、作業療法士の柔軟性と対応力には、毎回、驚かされています。

臨床実習は、作業療法士の職域を守る意味でも非常に重要な教育現場になります。今後も、臨床実習の在り方に関して知識や理解を深めて頂き、新たな仲間（学生）を教育できる指導者が一人でも多くなるよう努めていきます。



①一般介護予防事業『ハツラッツ』に高知県作業療法士会が参画！

高知県作業療法士会は、仁淀川町の一般介護予防事業『ハツラッツ』を支援しています。地域支援事業の実践や知識を有している作業療法士4名が2週に1回のローテーションで参画しており、地域住民の介護予防に取り組む熱心な姿勢と迫力に圧倒されながら、地域の方々と一緒に切磋琢磨しています。県士会で参画していくことで、個人での参画では気づかなかった視点や、楽しさ、作業療法の奥深さを実感しています。

②学術誌について 学術部では①会員の資質向上 ②他職種・他業種・県外の作業療法士に会員の取り組みを知ってもらう、この2点を目的に学術誌「高知県作業療法」を発刊いたしました。創刊号では特集論文5本と投稿論文5本を掲載しました。下記 QR コードから PDF を見られるようになっていきますので、一度読んでいただくと幸いです。

③認知症カフェへの参画

地域連携部認知症班では、認知症の人に携わる方を支援する目的で認知症カフェを2021年より開催しています。今年度は、『支援する方の情報交換会』『認知症に見られる症状と対応方法』『食事と認知症について』『認知症を予防する運動療法』などをテーマとして取り組みました。また認知症カフェのロゴを作成し活動のPRもしています。



(学術誌：高知県作業療法) (認知症カフェのロゴマーク)

(一社) 日本作業療法士協会 常務理事 三澤一登
愛媛十全医療学院

2021年5月29日の日本作業療法士協会代議員総会での役員改選において理事に就任し6月の理事会では引き続き常務理事に任命されました。気がつけば理事になって9期18年目に入ります。また、新執行体制では中村会長より教育部長の職を拝命いたしました。制度対策部長としては道半ばではありますが、心機一転、教育部長としての役割を全うする考えで会務運営にあたります。さらに、四国の作業療法士の皆様の声を協会に届けるべき活動に反映できるよう努めていく考えでおります。今後とも引き続き宜しくご支援ご協力をお願いします。

2022年度もCOVID-19の拡大に伴う様々な影響が考えられ、個々の生活スタイルの変更や臨床現場及び養成教育においても継続的に予測されます。日本作業療法士協会はCOVID-19感染対策/作業療法業務についてVer.3が示され、会議はオンライン形式に変更し、基本対面での活動は感染状況を見ながらの対応で場合によっては自粛の判断をすることになります。新しい生活様式への適応が求められておりますが、1日も早く普段の生活に戻りたいと考えているのは私だけでは無いと思います。

ここでは、協会活動に関する概略と私が関わっている部署に関連する情報を提供したいと思います。

「2022年度重点課題項目」

今年度は、第三次作業療法5ヵ年戦略の最終年でもあり、総括した内容を基に2023年度からの第四次作業療法5ヵ年戦略の策定に着手し、何度か理事会でも議論し共生社会・組織率向上の2つの柱をあげて取り組む方針が決定しております。共生社会の実現には引き続き地域包括ケアシステムへの寄与は重要で、作業療法士にとっても専門性と社会的な役割の一端を担うこととなります。一方で、組織率は職能団体としては社会的信用と信頼を得るための指標でもあるため喫緊の課題といえ向上に向けた具体的な事業展開が必要です。また、来年度からの協会組織再編に向け体制を整備すると同時に「士会員＝協会員」を目指し都道府県作業療法士会と連携し関連事業を推進していくこととなります。

「教育部関連情報」

一つ目は、2025年指定規則の改正に関連し作業療法教育の更なる検討が予定されております。3年生の専門学校においては、新カリキュラムで教育を受けた学生が臨床実習に臨みます。コロナ禍において臨床現場での対応が困難となり、本来ならば段階的に習得すべき技術面の体験が不足しております。一方で、臨床実習指導者講習会の受講者数も計画通り増加していることはありがたく思います。医療専門職は後輩育成に関し責任を持って取り組む必要があり、作業療法士の質を担保していくことがさらに望まれています。さらに、今後、検討が進められる協会・各養成校・都道府県士会・臨床実習施設が連携したコンソーシアム構想は、養成教育と生涯教育が連動し関係機関が一致協力した体制作りが鍵となります。

二つ目は、新生涯学修制度です。協会組織としては、生涯教育委員会に新生涯教育制度検討班と推進班として位置づけ検討を重ねております。卒業後2年から3年目を対象にした基礎研修の内容と項目につきましては、対象となる会員と管理者向けにアンケートを実施し分析した内容を基に具体的な検討を開始しております。また、基本的な技術面の習得に関しては、OJTを活用し地域の病院や施設における対応について検討も始まります。将来、認定作業療法士・専門作業療法士の取得に向け、制度全体を見据えながら会員の皆様へは随時情報を提示していく計画です。日本理学療法士協会は既に2022年4月からの運用を開始しております。本協会、教育部としても内外の団体からも認知頂けるより良い制度を目指してまいります。

三つ目は、研修運営に関して、コロナ禍による影響を懸念しておりましたが、新たなオンライン・システ

ムの導入に伴い研修受講を希望する会員が増加し更なる対応を検討しております。会員が学びたいときに学べる環境を提供できるよう努力していきます。

また、現行制度のシステム移行手続きに時間が掛かり生涯学習制度推進委員の皆様には、多大な労力と時間的負担をお掛けし申し訳ございません。さらに、新規の脳血管障害専門作業療法士の申請や臨床実習指導者講習会のポイント入力作業では事務的手続きの不備により会員の皆様にご迷惑お掛けしたこと重ねてお詫び申し上げます。

「制度対策部関連」

2022年の診療報酬改正から2023年度は介護報酬・障害福祉サービス料の改正を控え議論が開始されております。基本的な方向として考えられるのは、限られた財源の有効活用の為には実績評価に基づく費用対効果の検証です。一方では、成果・効果の根拠になるビックデータの集積と分析が開始されており、作業療法の成果を示すことが求められています。もはや「量」ではなく「質」の時代に入り医療の「効率化」と「質の向上」が継続的に進められている証拠でもあります。現場の作業療法士の臨床力の向上と質の担保というまでも無く、会員一人一人の意識を改めて見直す時期に来ています。作業療法の成果・効果を示すことの出来る指標や体制作りは継続的な課題といえます。

「組織再編」

魅力ある協会組織である為には、事務局の機能強化と理事の役割分担を明確化にして再編を推進し、適宜、迅速に対応できる即応性と機動性を構築していく必要があります。その為には、人材の確保と同時に人材育成の仕組みも強化していく必要があります。教育部内も制度対策部での再編経験を活かし対応していく考えです。

「関連情報」

私が、日本発達障害ネットワーク（JDDnet）の副理事長をしている関係で国土交通省の関連委員会では、バリアフリー法改正に伴う公共の交通機関・旅館や娯楽施設等、小規模店舗や都市公園に至る整備基準の検討が始まっております。これは、障害児者の活動・参加を促進するための社会的障壁をなくす取り組みです。さらに、厚生労働省の社会保障審議会に位置づけられている障害者部会においても参加する機会を得ており発達障害を中心になりますが専門的な視点も含め対応しております。

最後に、作業療法士の活躍の場は、保健・医療・教育・福祉・労働領域はもとより司法等新たな領域にも拡大しております。その背景にあるのは、物・道具を活用した作業を治療手段としており、年齢を問わず介入できる手段を有しているからです。作業療法士は、社会から当事者・家族から必要とされる専門職でなければいけないと思います。今こそ、作業療法の定義と法律に定められている作業療法士の目的を全うする必要があると考えます。今がチャンスと捉え、会員の皆様が半歩でも前に踏み出せるよう、皆様の後押しができる協会活動に今後も取り組みます。

「四国と全国をつなぐメッセージ」

(一社) 日本作業療法士協会 理事 岩佐英志

所属：合同会社ラシエイド 代表

四国作業療法士会連絡協議会の会員の皆様。第31回四国作業療法学会が盛會に執り行われましたこと、心よりお祝い並びにご準備いただきました浅川学会長をはじめ高知県作業療法士会の皆様に感謝申し上げます。31回を重ねた四国作業療法学会、思い出深きものがあります。学会は知識を共有するだけでなく人をつなぐ意味をもつものだと認識しております。特に地域の学会はその意味合いが特に高まるように思います。これからも四国の地域課題の解決に作業療法が果たす役割を考え、協会と士会が連携して前進していきたいと思えます。

よくよく地域の時代と言われますが、地域が元気になるために何が必要かを地域包括ケアシステムとして提案してきた矢先、2020年から続く新型コロナウイルス感染拡大が起きました。これは災害級の出来事です。その状況下にあつて、病院や施設・事業所で働く作業療法士の皆様にとっては、大変気苦労の多い中での業務が続いていることとお察し申し上げます。収束に向けてのスピードは日々変化しているように感じますが、まだまだ気を抜けないのは事実です。

しかし、この新型コロナウイルス感染拡大によって対象者数とそのニーズは減少したということは聞こえてきません。私は、運転リハビリテーションに関わる人が多いですが、本田技研工業株式会社安全運転普及本部と共に立ち上げました四国運転リハプロジェクトのメンバーの皆様からも運転のニーズは変化なしと聞いておりますし、都会ではむしろ運転再開の希望は高いように聞こえて参ります。作業療法は、生活に直結するリハビリテーションですし、社会参加とその人の生き方を支援するリハビリテーションを提供できる職種と考えています。

最近思うことは、作業療法の可能性を作業療法士自身が信じてリハビリテーションを進めていくこと、そのためには職能団体と意識を共有することが大切なのでは無いかと考えています。

私が担当させていただいております協会役職については、47都道府県委員会副委員長、表彰審査会委員、女性会員の参画促進事業担当理事となっており、各士会の皆様と共に地域課題に如何に取り組むかを検討する機会が多くあります。47都道府県委員会は各士会長の方々が委員となられていますので、地域特性や士会独自の取り組み、さまざまな関係団体との連携など非常に話し合うことの幅がある討議を重ねています。特に、当協会の組織再編を進めていく中で、47都道府県委員会は協会と士会を更に組織的に繋ぎ、協会員＝士会員という整合された構成イメージを共有しながら、この時代に見合う職能団体としての活動を展開していくつもりです。

新型コロナウイルス感染拡大によって、大きく社会構造が変化してきました。協会もしかり、良いものは続け新しい価値を取り入れて会員の方々の作業療法を支えていくことを検討してきましたし、今後もその方針に変わりはありません。特にモデルチェンジしたのは、学会をはじめ各委員会の会議や研修運営においてリモートが積極的に活用されていることが挙げられます。リモートのメリットは、今まで移動や時間、家族の事などで参加を見送ってこられた会員の方々が参加いただいていることが大きいと感じております。このことは担当しております女性会員の参画促進事業の中でもよくよく話し合われていることです。女性会員が子育てしながらも気軽に作業療法について学ぶ機会を増やすことは、地域の作業療法士をつなぎ、知識と技術の研鑽につながるはずで、そして何より大切なのが、お一人お一人のモチベーションが高まることであろうと思えます。情報が限られた中でいると不安になります。果たしてこの作業療法で良いのだろうか？考えてしまい、あるいは結論が見いだせないと安全な方法で着地することしか出来なくなります。それはそれで悪いという

ことではないと考えています。ただ、時代や個人に合った作業療法を考えた時、患者様やご家族様の思いに立ち返り、学ぶ機会を求めるとは無いかと思います。その行動がとても大切なのだと思います。

コロナ禍や社会情勢不安もありますが、動いてみる、人と関わってみる、学んでみることへの探求は尽きることは無いかと思います。私ごとですが現在、運転能力評価ツールの開発と販売、送迎スタッフへの安全運転オンラインサポートなどを進めておりますが、今まで作業療法士として出会ってきた患者様やご家族様の思いに向き合うことが凄く多くなりました。臨床をほぼ離れた状態ですので、作業療法士とのミーティングや工業やモノづくり、IT 産業や農業に関わる方々とも出会いが多くなりました。しかし、決して作業療法をどこかにおいていることはありません。新しいフィールドですが、障がいのある方の社会参加とそれを支える方々への提案をしていきたいと考えています。

これから、多くの作業療法士が育っていきます。医療や福祉、関係する知識や技術を一つずつ身につけていただきたいし、チャレンジしていただきたいと考えています。そして、人と繋がり自分のフィールドを広げてください。時に迷う時があると思いますが、先輩方のアドバイスが染みこむ時があると思います。四国の作業療法とリハビリテーションが更に発展するためには、四国作業療法士会連絡協議会と当協会がしっかりとタッグを組んで下支えしていくことが何より大切であろうと思います。

最後になりましたが、皆様の健康とご多幸と、益々のご活躍を祈念し挨拶とさせていただきます。

【編集後記】

令和3年4月より高知県から徳島県へと事務局を引き継ぎいたしました。貴重な機会をいただけたことに感謝いたします。来年度もしっかりと努めていきたいと思っております。

S. T